| 都道府県番号 | 6 |
|---|---|
| 都道府県名 | 山形県 |

【 ①□ ②□ ③☑ 】

## Ⅰ 学校名及び規模

| 学校名 | 酒田市立浜田小学校 | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 学年 | 1年 | 2年 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 特殊学級 | 計 | 教員数 |
| 学級数 | 1 | 2 | 2 | 2 | 2 | 2 | 3 | 14 | 23 |
| 児童数 | 41 | 57 | 45 | 65 | 56 | 55 | 18 | 337 | |

## Ⅱ 研究の概要

### （1）研究主題

算数科における確かな学力をつける実践
～評価規準（「おおむね満足」「十分満足＜質的な高まりや深まり＞」を明確にした指導実践～

### （2）研究主題設定の趣旨

授業でもっとも大切なものは「ねらい」である。「ねらい」は、評価そのものであり、評価規準を明確にすることは「ねらい」そのものを明確にすることであり、評価規準（「おおむね満足」「十分満足」）を明確にし、授業することは、授業の質を高め『確かな学力の向上』につながると考える。

## Ⅲ 研究の概要

### （1）研究推進体制

算数科教科担任と学級担任との算数における TT 指導と少人数指導（3・4年）
算数科以外の教科での補助的指導や TT 指導（3・4年）

### （2）研究の実際

**＜実施学年・教科＞**

3・4年生算数
① 児童の理解の状況に差が出やすい教科・学年であるため。
② 算数の学習において基礎的な力を一番つけなければならない学年であるため。

**＜研究の実際＞**

○テーマ
算数科における確かな学力をつける実践
～評価規準（「おおむね満足」「十分満足＜質的な高まりや深まり＞」
を明確にした指導実践～

〇研究の見通し（仮説）

子ども達が学習を進めるにあたり、「自ら学習内容を習得した実感」や友達との「学び合い」「伝え合い」「関わり合い」を通して学習内容を習得した実感が持てれば、より喜びの大きな深い学びとなるだろう。このような学びの姿を根底におき、学力向上を図る。

〇研究の内容・方法　　＜◎は、１５年度の研究の重点＞

◎「教科担任制」の設置

・算数科教科担任と学級担任とのＴＴ指導や少人数による指導　（特に３・４年生）

◎「ねらい」と「評価」の明確化

・国立教育政策研究所（報告）の評価規準に基づく自校の指導・評価計画＜評価規準＞（「質的な高まりや深まりを明確にした」）の整備とそれによる指導と評価の実践

◎細やかな指導を支える「学習者の実態把握」

・個に応じた指導をより効果的に行い、ねらい達成のための学習者の実態把握（レディネステスト・プレテスト）

◎指導形態の工夫

・実態把握に基づく個別や少人数による学習

・形成評価を通した個別や少人数による「補充学習」「習熟学習」「応用・発展学習」の導入

〇指導過程の工夫

・集団思考（話し合い）、相互の教え合い活動を取り入れた学習の展開

◎教材の開発

・個に応じた補充・習熟・応用発展学習教材の開発

・的確な学習の評価を行う自校テストの開発

◎総合的な学習の時間での「算数チャレンジの実践」

・総合的な学習の時間で「問題解決の力」を伸ばすことをねらいとした「算数チャレンジの実践と教材開発

**（3）研究の成果と課題**

〇　評価規準を明確にして授業を行うことにより、指導の質的向上が図られた。
算数科の「教科担任」を設置して、学級担任と TT 指導や少人数指導を行ったり、教材教具の開発をしたりしてきたので、児童は算数の学習を楽しみにするようになってきた。

〇　１時間１時間の学習シートを作成し学習を進めてきたので、後で自分の学習の足跡をふりかえることができた。

〇　形成評価のための学習シートや本校独自のワークテストを作成してきたことで、評価に生かすこともできたし、その後の補充にも役立てられた。また、授業の指導を振り返ることもできた。

〇　選択場面を増やしたり、振り返りをさせたりすることで、自分にあったコースが選択出きるようになり自己選択能力がついてきて、児童のさらなる意欲につながってきている。

▲　児童に分からないところは「分からないから教えて」と聞いたり、調べたりと行動を起こすことができる力をもっともっとつけていく必要がある。

▲　話し合いの活動では、発表に対して聞いている児童が、「そこのところがよく分からないから詳しく教えて」とか「僕はこう考えたよ」などと、どんどん話し合いが深まっていくように、聞く側をもっともっと発表に参加させていく必要がある。

▲　本校独自の学習シートやワークテストをよりよい物にするために、修正しながら作りかえ、

誰でも使えるように整備していく必要がある。
▲　形成的評価に基づき、個々の児童に合った補充・発展プリントの作成と指導の時間を確保し、しっかりと定着させていく。
▲　単元を通して、１時間１時間の授業で指導―評価―補充・発展のサイクルのさらなる充実を図っていく必要がある。
▲　学級担任外による教科担任制の充実を図っていく。

**（4）　フロンティアスクールとしての研究成果の普及**

①　平成１６年２月１３日に自主公開研究会を実施する。
②　平成１６年２月１７日に県全体で行われる『平成１５年度学力向上・学校評価研修会における実践発表会』で、「学力向上フロンティアスクール」としての本校の取り組みの実践発表を行う。

---

◇　次の項目ごとに、該当する個所をチェックすること。（複数チェック可）

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| 【新規校・継続校】 | ■１５年度からの新規校 | □１４年度からの継続校 | | |
| 【学校規模】 | □6学級以下 | □7～１２学級 | | |
| | ■１３～１８学級 | □１９～２４学級 | | |
| | □　２５学級以上 | | | |
| 【指導体制】 | ■少人数指導 | ■Ｔ・Ｔによる指導 | | |
| | ■一部教科担任制 | □その他 | | |
| 【研究教科】 | □国語 | □社会 | ■算数 | □理科 |
| | □生活 | □音楽 | □図画工作 | □家庭 |
| | □体育 | □その他 | | |
| 【指導体制の工夫改善に関わる加配の有無】 | ■有 | □無 | | |

---

【特色ある取組として紹介したいポイント】
本校では、算数科を研究の窓口とし、特に「指導に生かす評価のあり方」について研究を深めています。具体的には、全ての単元・１単位時間について評価規準を作成し、「おおむね満足」（B規準)、質的な高まりや深まりのある「十分満足」（A規準）の子どもの姿を具体的に明らかにして指導にあたっています。
また、学習者の実態把握のためのレディネステスト、自作テスト等の活用による形成的評価を実施するとともに、評価結果をもとに補充・発展の学習を確実に行うことで子どもたちの力をつけています。